

高校生のブレスト・キャンサー認識

三浦 鏡子

Understanding of Breast Cancer about High School Students

Kyoko MIURA

E-mail: miura@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：乳がん教育，高校生，自己検診，しこり

keywords: breast cancer education, high school students, self-diagnosis, induration

I はじめに

日本女性の乳がん罹患率と乳がん死亡率は、現状では上昇し続けている。それらの比率を減少させるためには、乳がんに関する教育が必要になる。そこでまず、女子大生を対象にしてアンケート調査を実施したところ、自己検診法も知らず、乳がんに関する知識もほとんどないことがわかり、女子大生には乳がんに関する教育が必要であることが、明らかとなった¹⁾。そこで本報では、高校生に対するその教育の必要性を 1) 学習関心があるか、2) どの視点から教育するのが効果的であるか、の2点から男女別に検討する。乳がんに関する教育（以後乳がん教育とする）は、高校生の段階で乳がんに関連の深い「家庭科」や「保健体育」などの教科で実施するのが効果的であると考えられる。学校教育における正規の教育は、人生においてプラスの教育効果を生むのが普通である。高校生の段階でというのは、大学よりも進学率が高いからである。男女大学生に教育するよりも、多数の人間に教育をすることができる。多人数に対する教育という点が重要である。教育効果は大きくなる。現状では高等学校の学習指導要領²⁾³⁾には、乳がんに関する規定は明示されていない。しかし教育は必要であるとの立場に本報では立つ。というのも、アメリカやイギリスでは死亡率が減少傾向にあるのに対して、日本ではまだ右肩上がりにそれが増加傾向にある⁴⁾からである。この改善・向上のためには教育が必要である。その教育は、20代で若年性乳がん罹患しないうちで、身体的精神的にもある程度成熟した高校2～3年生くらいの時にするのがよいと考える。高校生に対する乳がん教育についての論文はないので、本報で検討を試

みた。

II 方法

1 調査対象

対象は富山県に所在地があるA高校の高校生で男子44人、女子106人である。その内訳は、2年生が男子68.2%、女子55.7%—以下男女の順に記す—、3年生が31.8%、44.3%である。年齢は16歳が6.8%、6.6%、17歳が65.9%、53.8%、18歳が27.3%、39.6%である。

2 調査方法

調査時期は2011年1月～2月である。方法は自記式アンケートである。授業の最後に記入してもらい、その直後に回収した。有効回収率は98.1%である。

- 主な調査項目
- ①乳がんの認識語彙
 - ②乳がんの情報源
 - ③自己の乳がん罹患可能性
 - ④しこり確認方法の認識
 - ⑤乳がん学習希望時期
 - ⑥高校家庭科保育分野での乳がん学習希望
 - ⑦乳がん学習希望理由
 - ⑧乳がん学習希望方法
 - ⑨乳がん手術後の自己の価値
 - ⑩乳がんに関する学習希望内容

III 結果及び考察

1 乳がん認識語彙・乳がん情報源

表1からみると、乳がんに関する「認識語彙」には男女差があり、各項目に対する認識率の高さか

ら、女子の方が乳がんに対する関心が高いといえる。そこで女子について述べよう。「ピンクリボン運動」を見ると、女子は約4割が認識しており、社会的広報・啓蒙活動の成果が一応評価できる。「超音波検査」についても、約2割が認識を持っている。これはこの年齢の女性に対する乳房の性質から見て、画像診断がし易いため、乳がん検査法として、特に、20～30歳台の女子に用いられる。約2割という認識率は、正規に教育されているわけではないので、妥当な数字である。一方、40歳台以上の女子に用いられる「マンモグラフィー」には認識が低い。「乳房温存手術」には9.4%の認識しかないが、この手術法の存在を知らせる必要がある。現状では、この手術法が主流⁵⁾である。この手術の目的は、再発率を高めることなく、美容的に満足できる乳房を残す⁶⁾ことにある。副次的には、手術後のQOL(生活の質)をよく保ち、手術後の精神的安定を保つことができる、という利点がある。若い女性の場合、乳房を喪失することには抵抗が大きい。この手術法を知らせて、あらかじめ乳房喪失の不安を取り除いておくことが重要である。乳がん「情報源」における男女共通の傾向は「新聞・雑誌・TV」から多くの情報を得ていることである(表2)。これらの影響力が大きいことは分かったが、しかしその情報の質については、検討の余地があると考えられる。男女における著しい違いは「乳がん」について全く

「知らない」(知識がない)男子が、約36%いることである。男子は、乳がんに関心を持っていないために、情報があってもキャッチしていないことが窺える。ここで付け加えると、別の質問項目を用意して「母から」情報を得たか否か尋ねたところ、「母から」情報を得たとするのは、女子に3人いるのみであった。

2 自己の乳がん罹患可能性・しこり認識

自己の罹患可能性を表3から見ると、男女差があり、女子の方が「あり得る」と考えている。そこで、表4から「しこり」確認方法の認識率を見ると、男子約1割、女子約3割で男女差が幾分かある。この結果から、男女共通に、①乳がんは「しこり」ができることが多いことを理解させ(一般的にはそうなのでそれを採択する)、②触診一手で触る(自己検診)によってしこりの有無・大きさを確認する方法及びその確認意義を教育する、ことが是非必要である。乳がんは自分で発見可能な唯一のがんなので、可能な限り小さいがんを発見することが、死亡を避ける手段であることを明確に指導する。もちろん、乳がんの種類は非浸潤がん、浸潤がん、パジェット病などに分類できるが(必ずもしこりを伴わないものもある)、これを教師は了解のうえで指導することになる。「しこり」以外の乳がんについても紹介のみしておくことよい。一般的には「しこり」の認知ということで指導を行い、「しこり」発

表1 性別認識語彙

	抗がん剤	放射線療法	ピンクリボン運動	人工乳房	ホルモン剤	超音波検査	マンモグラフィー	乳房温存手術	M.A. (%)
男子(N=44)	34.1	31.8	15.9	9.1	18.2	20.5	4.5	4.5	
女子(N=106)	55.7	52.8	42.5	29.2	27.4	20.8	13.2	9.4	

表2 性別情報源

	新聞・雑誌・TV	知人・隣人の罹患患者	乳がんについて全く知らない	その他	M.A. (%)
男子(N=44)	63.6	9.1	36.4	2.3	
女子(N=106)	80.2	8.5	10.4	3.8	

表3 性別罹患可能性 (%)

	あり得ない	あり得る	分からない
男子(N=44)	11.3	36.4	52.3
女子(N=106)	1.9	47.2	50.9

χ^2 検定 p<0.05

表4 性別しこり確認方法 (%)

	分かる	分からない
男子(N=44)	6.8	93.2
女子(N=106)	33.0	67.0

χ^2 検定 p<0.01

見後は良性のしこり（乳腺症など）か、乳がんであるかの判定は病院に任せることになる。高校生には「しこり」を発見したらすぐに医師の診察を受けるように指導する。高校生への指導は、病院へ診察を受けに行くことというところまでにする。医師ではないので医学的な指導は行わない。

3 乳がん学習希望時期・学習希望理由・学習希望方法

表5から、男女は共通に高校時代に「乳がん」を学習したいとしている。ここで特に取り上げて特定の教科、つまり、高校家庭科保育分野での学習希望を表6から見ると、男女間に違いがある。女子の約7割の希望に対して、男子は約3割のみの希望である。この理由は表7で見ると明確である。女子は学習希望理由が明確で、それらは「乳がんについて知りたい」「一般知識として知りたい」「出産時悪影響を知りたい」である。特に「出産時悪影響を知りたい」は、保育分野の学習内容に関連が深い。これに対して、男子は学習希望理由を明確に持たない。この違いが、高校家庭科保育分野での学習希望の違いに表れたといえる。女子には、出産に関する阻害要因を排除するという視点から、保育分野で乳がん教育を行うことが、有効であると考えられる。出産に関する阻害要因の排除は、女子が学習をするための強い動機づけになることが分かる。男子には、

学習をするための動機づけの点から、女子とは異なる別の視点を準備する必要がある。それを探すことが必要である。乳がんの学習希望方法を表8から見ると、男女間に違いがあり、女子の方が各項目への希望度が高い。女子は特に「女性専門医の話」「罹患者の経験談」⁷⁾を聞きたいとしている。年齢が若いので、これらの間接経験による方法を授業で採択することも検討に値する。「乳がんモデル」（シリコン製でしこりが実物と同様に作られているもの）で「しこり」を触診することへの希望が女子でも約3割しかないが、これは「乳がんモデル」の存在を知らないためであろう。しかし、「しこり」体験は重要であるから、男女に体験させたい。①自己検診法（自分の乳房にがんがあるかどうか触る）、②「乳がんモデル」での「しこり」触診、この①と②をセットにして実際にやってみさせることがポイントになる。

4 手術後の自己の価値

乳房温存手術で、がんを小さく円状にくりぬく場合（乳房円状部分切除術⁸⁾）は、乳房の形は手術後も美しく保てる。しかし、これ以外の大きくえぐり取るような乳房温存手術をした場合は、傷が残るし変形もする。非定形的手術の場合はもちろん傷も残るし変形する。手術後の自己の価値については、特に、女子の場合に問題となる。女性的価値が変化

表5 性別学習希望時期 (%)

	高校時代	高卒後必要を感じた時	罹患した時自分で	その他
男子 (N=44)	59.1	36.4	4.5	0
女子 (N=106)	72.6	22.6	2.8	2.0

表6 性別保育分野での学習希望 (%)

	学習したい	学習しなくてよい	分らない
男子 (N=44)	31.8	9.1	59.1
女子 (N=106)	67.0	1.9	31.1

χ^2 検定 p<0.01

表7 性別学習希望理由

	乳がんについて知りたい	一般知識として知りたい	出産時悪影響を知りたい	がん家系で早期発見のため
男子 (N=44)	11.4	0	13.6	4.5
女子 (N=106)	61.3	34.0	32.1	13.2

M.A. (%)

表8 性別学習希望方法

	VTR・DVDを視聴する	女性専門医の話聞く	罹患者の経験談を聞く	冊子・パンフ・教科書で説明を聞く	乳がんモデルを触る	学習不要
男子 (N=44)	47.7	31.8	27.3	36.4	9.1	34.1
女子 (N=106)	75.5	57.5	50.0	36.8	28.3	6.6

M.A. (%)

表9 性別手術後自己価値 (%)

	下がる	下がる	分からない	その他
男子 (N=44)	15.9	6.8	75.0	2.3
女子 (N=106)	17.9	28.3	49.1	4.7

χ^2 検定 p<0.01

するかしらないかということの意味する。それゆえ、教育のポイントは男女で異なる。つまり、女子には、自己の価値は手術以前と同様に保てるという教育をする。男子には、手術後の女性に偏見を持たないこと、という教育をするのである。将来自分自身に問題が降りかかった際に、男女ともに理性的判断ができるようにしておくのである。表9から見ると、大きく切除した乳房温存手術あるいは、非定形的手術をして、傷が残り乳房が変形した場合、手術後の自己の価値についてどう思うか尋ねると、「分からない」者が、男女共通に多数である（選択肢は自己の価値は①下がる、②下がる、③分からないの3件法）。「分からない者」が多数であることからこの質問は高校生には年齢的に難しかったと推測される。しかしこれは、自分の価値は手術後に「下がる」という自覚を持たせる指導のために、重要な質問である。現在の社会通念では、手術して傷が残り変形した女性は、女性的価値が下がるというような扱いを受ける傾向があり、これを是正する必要がある。一般的には、傷のあること自体が精神的にショックとなり、女性的価値が下がったと考える女性が多いのも事実である。これの変革も本当は必要である。そこで「分からない」者に対して、「価値は下がる」と教育しておくのである。これによって、社会通念も次第に変わっていくであろう。対象である女子高校生は、年齢的に若く、女性的価値について尋ねたつもりであったが、これを十分に理解できないために「分からない」という回答をしたと考えられる。女子大生の調査結果ではきちんと理解して回答していた。これは精神的・社会的成熟によるものであろう。

5 学習希望内容項目

図1は、学習希望内容項目の各項目ごとに1-7の段階を設け希望する数字に○を一つつけてもらい、4を0点とし、5(+1点)、6(+2点)、7(+3点)、3(-1点)、2(-2点)、1(-3点)として合計した結果を上位6位(女子64点以上、男子11点のみ)まで上げたものである。図1から見ると男女間に

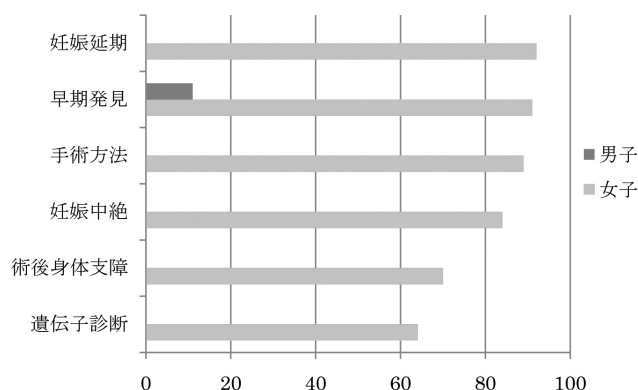


図1 学習希望項目 (女子64点以上, 男子11点のみ)

図1の学習希望項目の詳細は下記の通りである。

妊娠延期：術後は妊娠を延期する必要がある。

早期発見：しこりの早期発見により死を回避できる。

手術方法：手術方法は複数あり、選択できる。

妊娠中絶：妊娠中の罹患は中絶の必要がある場合もある。

術後身体支障：術後には身体に支障が出る場合もある。

遺伝子診断：遺伝子診断により、罹患の可能性を知ることができる。

著しい違いがあり、女子は6項目にかなり高い学習希望があるが、男子は「早期発見」にしか希望がない。男女が共通に希望する「早期発見」であるが、統計的に見た発見率では、自己検診をして自分で乳がんを発見したケースが最多数⁹⁾である。そこで、1ヶ月に1回定期的に行う自己検診が、早期発見に繋がることを男女に指導する。①「妊娠延期」と②「妊娠中絶」は出産という事実に関連が深い。ここでついでに、女子に将来子どもを産みたいかどうか尋ねると、「産みたい」65.1%、「まだ分からない」23.6%、「産みたくない」11.3%であった。出産希望者が多いとみなしてよい。そこで、将来に向けて、なぜ①と②の項目に、乳がんの罹患が影響を及ぼすのかをきちんと説明しておく必要がある。

IV まとめ

調査の結果、次の1)と2)が明らかになった。

- 1) 乳がんに対する学習関心は、男女で違いが見られ、女子の方が高い関心がある。女子は「妊娠延期」と「早期発見」に高い関心があり、学習

をさせやすいと言える。男子は、この病気が女性特有のものと思われているため関心が低いと考えられる。しかし、男子にも、罹患可能性のあることを¹⁰⁾理解させ、自己の身体を死から守るために教育が必要である。

- 2) どのような視点から教育をするのが効果的か。男女共通に行うべき教育は乳がんの「早期発見」の視点から行う教育である。女子に限定すれば、子どもを産むための阻害要因の排除という視点からの教育が極めて効果的である。男子に対する教育は、「早期発見」以外にも、何か学習の動機づけになる要因を用意する必要がある。

男女高校生に対する乳がん教育は、彼らの発達段階を考慮し、乳がんで死なないために早期に乳がんを発見しよう、という教育になる。乳がんを見つけるために、自己検診を励行しましょうということである。注意点は必要以上の恐怖感を抱かせないことにある。実際に指導する教科はというと、本調査対象の女子高校生には、高校家庭科（保育分野）で教育するのが適切である。一方、高校保健体育での教育が妥当¹¹⁾であるとの意見もある。両見解を考慮すると、両教科で教育をするのがよいと考える。内容的には両教科について更に検討を要するが、繰り返し教育することで、学習事項は定着するからである。

日本の現状は、乳がん患者が欧米では減少しているのに増加傾向にあること、乳がん死者も増加していることが特徴である。換言すれば、乳がんの早期発見率を上げ、死亡率を下げる必要がある。それなのに、政府は学校教育における教育手段を講じていない。学校教育における正規の教育によって、早期発見率を上げ、それによって初期のうちに手術をすることで、死亡率は減少する。新聞やTVによる断片的な知識を獲得しても、表4から見ると「しこり」の確認方法も女子で約3割しか理解していない現実がある。乳がん教育は学校教育による方法が、教育効果を上げる点からは最適である。乳がんに関連の深い教科は「家庭科」と「保健体育」であろう。学校教育で指導する内容は、社会的要請による場合も含まれる。調査結果からは、乳がん学習意欲は、女子は比較的高いといえるが、男子は女子よりも低い。しかし、仮に乳がんに関心が低くても学習させなくてよいということにはならない。社会的に必要性があると判断すれば教育することに意味

がある。「しこり」確認方法で言えば男女ともに95%程度の認識率がほしいところである。調査結果から鑑みると、社会的要請の視点から、高校生に乳がん教育をすることの必要性が認められる。是非、学習指導要領に乳がんの指導を規定することが望まれる。日本の乳がんの現状を改善・向上していくため、乳がん教育を、社会的要請によって、学校教育に導入することは、現状ではすぐに必要である。

この調査を実施するに当たり、ご協力頂いた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献及び注

- 1) 三浦鏡子. (2011). 女子大生のプレストキャンサー認識. 富山大学人間発達科学部紀要, 5 (2), 17-21頁
- 2) 高等学校学習指導要領. (1999). 平成11年3月現行のもの
- 3) 高等学校学習指導要領. (2009). 平成21年3月平成25年度から実施されるもの
- 4) 中村清吾 (2009). 乳がんと言われたら・・・. 保健同人社, 2
- 5) 日本乳癌学会 (2009). 患者さんのための乳がん診療ガイドライン2009年版. 金原出版, 73
- 6) 5) と同じ, 74
- 7) 「健康と病の語りデータベース」
www.dipex-j.org
この中のいろいろな病の中から「乳がんの語りデータベース」を用いるとよい。乳がんの症例もいくつかある中から選択できる利点がある。これはインターネットで見られるので、教室に乳がんの罹患経験者に来てもらわなくてよいので便利である。
- 8) 4) と同じ, 88
- 9) 4) と同じ, 37 15816人の乳がん罹患者のうちの71.0%が自分で乳がんを発見した人である。
- 10) 野口正邦. (2004). 乳がんテキスト. 南江堂, 32この中に以下のように記されている。
男性の乳がん罹患数は、女性の乳がん罹患数の1/100と極めて少ない。男性は気付くのが遅く、手遅れになるケースが多いので、自己検診が必要である、と。そこで、筆者が乳がんの罹患患者数の実際を、男女別にデータで見とみることにする。「がんの統計2010年版」(財団法人がん研究振興財団) 76頁で、2005年度(これが最新のデータ)

の乳がん罹患者数をみると、女性は50695人（罹患者率17.8%）である。男子の罹患者数は、女性の1/100ということなので、約506人と推定される。

11) 朝日新聞2011年9月6日(火)、中村清吾・昭和大学教授が、若いときに保健体育の授業などで学んでおくといいと述べている。

(2011年10月18日受付)

(2011年12月14日受理)